

〈祈りのために〉

事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、『われわれも、確かにその子孫である』。このように、われわれは神の子孫なのであるから、神たる者を、人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じと、見なすべきではない。神は、このような無知の時代を、これまでは見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられる。神は、義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである。(使徒行伝 17:27b-31)

あらゆる点で、すこぶる宗教心に富んでいたアテネの人々は、技巧や空想を駆使して夥おびただしい偶像を作り出し、挙げ句の果てには「知られない神に」と刻んだ祭壇を作り出すまでに至りました。一方、現代日本に住む私たちは、科学万能主義ともいべき時代に生きており、人々は宗教に関心を抱くヒマさえなく、ひたすら厳しく苦しい生活に追われています。私たちは、教会の不振を嘆き、とかく生まれた時代や生活する場所を託かこつことが多いのですが、パウロが「今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならない」と語った言葉に注目しなければなりません。この命令は、当然、今を生きる私たちにも適用されます。それは、神がイエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、私たちを含むすべての人にその確証をお与えになったからにほかなりません。

パウロはアレオパゴスの評議所の真ん中に立ちながら、すべての時代、すべての民に適用されるべき真理の言葉を語りました。それは

「神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである」という圧倒的な神のリアリティーに裏打ちされた宣言でした。神と出会い、神に打ち倒され、神によって作りかえられたパウロを突き動かしていたあの神のリアリティーが、いま私たちにも迫ってきます。キリストの復活にあずかっている私たちは、あたかもそれを知らなかった無知の時代にいるかのような生き方はできません。いまや神は、そのような生き方を見過ごしにされないのです。

コロナウイルスの蔓延、ミャンマーやアフガニスタンにおけるクーデター、ロシアによるウクライナ侵攻など、全世界が閉塞感に覆われているこのような時代であるからこそ、いよいよ悔い改めを宣べ伝え、キリストの福音を語ることに熱心に励もうではありませんか。私たちは、終わりの日における神の義なる裁きを知っているのですから。

〈祈り〉 神さま、罪に汚れ地上にはかなく生きる私たちを悔い改めへと招いてくださり、キリストの死と復活にあずかせてくださった恵みに感謝致します。この困難な時代においてこそ、キリストの証人としての歩みを貫かせてくださり、あなたの栄光をあらわし、キリストの香りを放つよき奉仕をなすことができるように、私たちひとりびとりを導いてください。

小塩海平 (大会靖国神社問題特別委員会委員長・東京告白教会長老)

新シリーズ『その時に備えて Part 2』を読む (9)

川越弘 (沖縄伝道所牧師)

Q8 天皇の「慰霊の旅」も問題だということですか？

A8 天皇の激戦地訪問の問題は、A6 で触れたので、ここでは「慰霊」について考えてみましょう。近年、報道においても「慰霊」という言葉がよく使われるようになっていきます。

しかし、亡くなった方の死を悼み、生前の思い出を心に刻むことは、英語で言えば「Memorial」であり、日本語では「追悼」が適切な用語です。それに対して「慰霊」とは、「死者の霊を儀式等で慰める」という意味で、あえて英訳すると「comfort the spirit of the dead」となります。「Memorial」とは、随分意味合いが異なります。

死者の霊を供養等によって鎮める「鎮魂」、靖国神社等において戦死者の霊を指す「英霊」や「顕彰」などと共に、「慰霊」も日本の文化や習俗にすでに定着しているとも言われます。しかしそれは、英霊の尊崇の推進に与(くみ)することにもなりかねません。祖先崇拜など宗教観や、戦争肯定などの歴史観が表れる言葉であることを意識する必要があります。

ですから、宗教的思想を背景とする「慰霊」という言葉が、国や地方自治体の行事を指して用いられるのは、政教分離原則にそぐわないことです。さらに、多くのメディアが、天皇の激戦地訪問を「慰霊の旅」と報じていることも、ふさわしい用語の選択ではありません。「追悼」の言葉を「慰霊」と峻別して、意識的に用いるよう心がける必要があるでしょう。

《コメント》 慰霊は、「慰める」と「霊」という言葉の組み合わせから、この世を去った人の霊を慰める、死後の幸福を祈ることを意味します。この行為は、自分の感情を死者に移入するものです。この宗教的感性は、キリスト教以外のほとんどの宗教に包含されています。カトリックにもあります。この「慰霊」信仰が、靖国信仰を成立させているのです。天皇(勅使)が靖国神社を参拝することによって、戦争を呪って家族との別れを悲しんだ戦死者や、戦死者を出した遺族の悲しみの感情を、天皇と国家のために死んだという誇りと喜びの感情に変えるのです。この「感情の錬金術」を中核とする「英霊顕彰」(戦死者の霊を英雄として敬い、その功績を広く知らせること)のための装置が靖国神社です。

前天皇は、戦争の激戦地であった広島・長崎・沖縄、タイ・マレーシア・インドネシア・中国に「慰霊の旅」をして「痛切な気持ち」を表しましたが、一度も戦争犯罪の謝罪をしておりません。そしてこの「慰霊の旅」によって、「戦後が終わった」としたのです。

2018年3月27日～29日、前天皇は沖縄と与那国を訪問し、27日に沖縄国立戦没者墓苑の前で「供花」し「追悼」しました。3月27日は、1879(明治12)年、琉球処分官松田道之

が、警官・軍隊400人の武力によって首里城を取り囲み、日本政府が廃藩置県を行なうことを通達した沖縄の歴史の中で最も屈辱の日です。現在、この戦没者墓苑のホームページの説明文には「悲惨な戦争により、犠牲になった人々の御霊が安らかに眠る」とあります。これは、石原昌家沖縄国際大名誉教授らの「戦争を美化するような表現が見られる」という指摘があったため、2020年6月12日に書き換えられたものでした。それまでは「国難に殉じた戦没者の遺骨を永遠におまつりする」と説明されていたのです。前天皇は、この文言の前で「供花」し「追悼」したのです。「天照大神の子孫」とされる天皇が、沖縄戦で亡くなった沖縄独自の宗教性を持った沖縄の民衆を、天皇のために「国難に準じた戦没者」へと同化し、崇高な死として追悼したのです。その後、遺族ら一人一人に「長い間ご苦労さま」「お大事にね」「たくさんの方を守ってくれてありがとう」と声をかけた、と報じられています。一体、沖縄戦の最高責任者は誰だったのでしょうか、そしてその責任を誰が受け継いでいるのでしょうか。その責任を取る努力をするという一点にこそ、天皇の存在意義があるのです。

「谷内さんからの宿題」

渡辺輝夫（日本キリスト教会北海道中会ヤスクニ・社会問題委員会夕張伝道所牧師）

谷内榮さんは亡くなるまで、夕張に赴いたわたしと小さな伝道所を覚え、毎年クリスマス献金を送ってくださった。あのD・ボンヘッファーや聖書のことばを引用した激励のメッセージとともに。おそらく最後は渾身の想いを込めて綴ってくださったのであろう、筆跡はおぼつかないものになっていた。榮さんは、夕張に思い入れがあった。それは北陸・金沢出のお父さんが北海道に渡り最初に入られたのが夕張炭鉱だったから。その住み始めた場所さえ特定できており、今度気候が良くなったらご案内いたしましょうと約束までしていたのだった。

榮さんに始めてお目にかかった（厳密に表現すれば「遠くから拝見した」）のは、東京で行われた平和遺族会全国連絡会の立ち上げ集会（1986年）だったと記憶する。当時わたしは、その初代代表になる故小川武満先生（元日本キリスト教会恵泉伝道所牧師。「第13回政教分離を守る北海道集会」1994年講師として来道）のもとで牧師となるべく訓練を受けていた。そこにひとときわ長躯の榮さんが登壇し、北海道の様子を報告されたのだ。「日本遺族会を脱して『平和』遺族会をつくろう」、そう言って一軒一軒寒風の中をたずね回って出来上がった報告をわたしは感銘深く伺った。それからほどなく、わたしに牧師として旅立つときが訪れ、何とそれが北海道、日本キリスト教会札幌豊平教会であった。その赴任直後、おどろくことに榮さんから連絡が入り、ご子息の結婚式の司式をしてもらいたいというのだ。それがわたしの最初の司式経験になった。それから、同じ教派ということもあり、色々なところで声をかけていただいた。ところが、臆病で小心者のわたしは、あの榮さんのなにもものも恐れない毅然とした姿、とりわけヤスクニをめぐる問題への鋭く激しい発言に気後れして逃げ回っていたと正直告白せざるを得ない。けれどじつは、あの激しい発言

の背後には肉親（お兄さん）を戦争で失った遺家族の深い悲しみ、そういう事態を引き起こしてきた靖国思想への痛苦と怒りが深く潜行していたのだということを知ったのはずっとあとからであった（平和遺族会全国連絡会「戦争を語りつたえるために」梨の木舎所収）。本当に申し分けないという思いである。

そうこうしていたとき、恩師小川牧師から、「中国教会を訪ねる旅」をするから参加しないかと誘いの電話をうけた。1993年のことである。もう何年か続いていた中国に対する戦争罪責を問う旅であった。意を決して参加したらそこに榮さん、さらに旭川教会（当時も旭川）の北村一幸牧師も参加されていた。その年は、北京から夜行列車で内モンゴルの赤峰、そしてかつて関東軍による熱河作戦が繰り広げられた省都承德へ至るというもの。案内された郊外にわたしたちはまだ野ざらしの骨さえ散見されるという現実言葉に言葉を失った。大草原に寝そべて共に大空をみあげたひとまとともに、日本の加害責任を強く確信させられた旅であった。

そしてついに、榮さん生涯最大の戦いになる砂川政教分離訴訟に結実していくのである。これについては多くの方が証言されることと思われる。榮さんはともに戦う仲間を求めていた。西川重則さん（平和遺族会2代目代表）が亡くなったときにも、本当に落胆して電話をかけて来られた。同志を失った悲しみが切々と伝わって励ます言葉もなかった。

今谷内さんの「おーい もういいだろう。しっかり頼むぞ」 そんな声が天上から聞こえてくるようだ。もう逃げ回ってはいられない。谷内さんからの宿題、今この貧しい告白をしたためることがわたしにとってその第一歩である。

（北海道政教分離ニュース No.95号「谷内榮さん追悼号」より転載させて頂きました）

<ヤスクニ問題関連ニュース>

○インドネシア独立戦争中の軍の暴力 オランダ首相が謝罪 両国専門家が報告書

オランダ政府の支援のもと両国の学者や歴史家で結成された調査チームは17日、1945年から49年にかけてのインドネシア独立戦争中に、オランダ軍が組織的で過剰な暴力をふるい、それを政府が容認していたとする報告書を発表しました。オランダのルッテ首相は発表を受け「オランダ政府を代表しインドネシアの人々に深く謝罪する」と表明しました。

報告書は、オランダ軍が▽超法規的な処刑▽虐待や拷問▽非人道的な拘留▽家や村の放火▽財産や食料品の盗難・破壊-といった「極端で広範囲にわたる暴力」が行われたと指摘。「政治、軍事、司法のあらゆる分野で容認されていた」と明らかにしました。

また、過剰な暴力がオランダ政府との緊密な協議のもとで行われ、メディアも無批判に支持したとして「植民地精神に根ざしていた」と結論づけました。

調査は、両国の専門家が主導し、4年以上かけて行われました。オランダ政府が歴史検証の一環として資金を拠出しました。<以下略> (しんぶん赤旗；2022.02.19)

○ウクライナは「私たちの歴史と重なる」 ケニア大使の演説に高評価

ウクライナ情勢をめぐり21日に開かれた国連安全保障理事会の緊急会合で、ケニアのキマニ国連大使が行った演説が高く評価されている。軍事力を振りかざしてウクライナ東部の2地域の「独立」を承認したロシアの行動を、帝国主義によって分断されたアフリカの苦難の歴史をもとに「正当化できない」と明確に非難した。

「この状況は私たちの歴史と重なる。ケニアや、ほとんどのアフリカ諸国は帝国の終焉しゅうえんによって

誕生した。私たちの国境は私たちが自分で引いたものではない。ロンドンやパリ、リスボンなど植民地時代のはるか遠くの大都市で引かれたものだ」。

アフリカは19世紀から、英国やフランス、ポルトガルなどの欧州列強の植民地支配を受け、列強同士が勝手に決めた国境によって「分割」された。「今でもアフリカ諸国では国境の向こう側に、歴史的、文化的、言語的に強く結ばれた同胞が暮らしている」。約6分間の演説の中で、キマニ氏はそう語った。

英国の支配下にあったケニアが独立したのは1963年だ。

キマニ氏は「もし独立する時に、民族や人種、宗教の同質性に基づく国家を追求していれば、何十年も血にまみれた戦争を続けることになっていただろう」と強調。「その代わりに、私たちは(列強によって引かれた)国境を受け入れ、アフリカ大陸の政治的、経済的、法的な統合を目指すことにしたのだ。危険なノスタルジアで過去を振り返り続ける国家をつくるのではなく」と語った。

ロシアはウクライナ東部の親露派支配地域で「独立」を望む声が大きくいと主張した。

キマニ氏は「同胞と一緒にになりたいと思わない人はいないし、同胞と共通の目的を持ちたいと思わない人はいない」としつつ、こう言葉をつないだ。「しかし、そのような願望を力づくで追い求めることをケニアは拒否する。私たちは、二度と支配や抑圧の道に陥ることなく、今はなき帝国の残り火から、回復を遂げなければならない」

(毎日新聞；2022.02.23)

806号ヤスクニ通信 2022年3月13日 発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 発行人・編集・発行 小塩海平(東京告白教会)

<編集後記> コロナ禍における礼拝後の靖国祈祷会で読み上げるには、<祈りのために>が長すぎるというご意見を頂きました。要約をつけるのも難しく、今号では、聖書箇所と祈りの部分をやや長めにし、本文を短めにしてみました。各教会で読み上げる箇所を工夫していただければと思います。K.K.